

水族館における地域文学と連携した市民参加型展示の開発

○井上美紀・園山貴之・立川利幸¹⁾，高田浩二²⁾

(¹⁾ 下関市立しものせき水族館，²⁾ 海と博物館研究所)

これまで下関市立しものせき水族館（以下，当館）では，磯の観察会や，館内での解説イベントなどを実施してきたが，2019年より新たに地域の教育資源を活用した地域連携型の海洋教育プログラム「海響館と巡る“みすゞ”が見た海の世界」を開発した．そのなかで参加者が創作した作品を展示した「第1回みすゞあーと」の実施について報告する．

本展示会の目的は，参加者が詩やプログラムの体験を通して感じたことを作品にして表現し，作品に込めた思いなどを共有することで，生命や環境に対する多様な視点を獲得することとした．

展示会開催にあたり，地域の教育資源として下関にゆかりがある童謡詩人「金子みすゞ」（以下，みすゞ）に着目したプログラムを開発・実施した．本プログラムは2019年9～11月までの間に計3回実施し，参加者は計27名であった．みすゞは下関で海洋生物や海の環境に関する詩を詠み，現在も当館周辺の徒歩圏内にはみすゞが生活した跡地を巡る「金子みすゞ詩の小径」（以下，詩の小径）がある．また地域連携として詩の小径周辺の地域の人々の協力を仰いだ．本プログラムは1回を2日間連続参加とし，1日目に魚市場と当館で生き物探しを，2日目は詩の小径を歩き，途中4つの施設でみすゞが生きていた当時の建物，カメラ，雑誌などの資料を地域の人々から説明を聞き，交流の機会を設けた．また，実施者はみすゞが物事に対して「不思議」や「なぜ」と感じたことを表現した詩を用いて，参加者自身が想像や考えを深められるような「投げかけ」をし，参加者の発話を引き出そうとした．そのほか，参加者には自由に記述できる記録用紙を配布し，後の創作のヒントや家庭での振り返りになるようにした．2日目の最後に創作活動を行い，作品完成後にどのような思いで創作したかを発表し合い，参加者の気づきや思いを共有した．プログラム実施後の2019年12月から約1か月間に当館で本展示会を開催した．展示作品を紹介するキャプションは参加者が自由に作成し，展示会終了後は作品を自分自身や家族など，参加者が贈りたい相手に届くように発送した．

展示作品は，みすゞの詩からイメージしたものや，水族館で知って好きになった生き物，みすゞが働いていた書店と海の中を融合した作品など多種多様なものとなった．

事後アンケートの自由記述では「多面的な見方がより深まった」，「お互いの作品を通じて，様々なものの見方，感じ方についても知ることができた」など，お互いの生命や環境に対する多様な視点の獲得に繋がったと考えられた．

課題として事後アンケートのタイミングが参加の1週間後と時間があつたため無回答があるなど，回収方法の検討が必要である．また，参加者が想定より少なく，2日間連続参加のハードルが高いとの意見もあり，1日に短縮したプログラムの検討をしたい．地域連携した施設からの回答に「もっと地域と連携していくとユニークな企画ができるのでは」と，今後への期待があり，継続して市民が参加する水族館のプログラムの開発に取り組みたい．